

緑の光をたたえた水底

## 会越国境 川原井戸沢～風来沢

佐藤(耕)

【日時】 2010年7月10日(土)～11日(日)

【メンバー】L栗原・田邊(一)・金沢・佐藤(耕)

「大白沢は白やグリーンタフのナメが続く穏やかで美しい沢」と木下さんが書いていたように、この風来沢などが注ぐ只見川の流域には緑色凝灰岩が多い。大白沢という名は、川底の岩で川が白く見えるから、という説があるそう。ここ川原井戸沢のゴルジュに入っても、白っぽく薄緑のギチッと締まった岩と、緑の光をたたえた水底が印象的だ。

2005年の8月末に手嶋さんたちが入渓したときの、記録のタイトルは「会越国境の隠れた名渓」。その理由は緑の光をたたえた溪相はもちろん、「ゴルジュの突破はとても楽しい。……だんだんどこも確実に突破できることがわかってからは緊張感も薄くなり、楽しみの部分が増えてくる」というもの。そのゴルジュを前に、入渓して1時間ほどたったころ、予報にはないのにザッと降り出して心配するが、通り雨らしい。



ゴルジュとはいっても、はじめの二俣までは浸かるというほどではない。一旦開けて森が沢筋に降りてきたと思ったらまた隘路となり、泳いだり浸かったりすることには、陽が差し込んできた。ここは緑色凝灰岩とは違う、白茶色の岩盤のナメ床が広がり、水が穿って流れている。

先が白く煙りだして、雪渓を知らせている。洞門のようなスケールの雪渓を潜っては水に浸かって3つ4つと抜けるころには、空も青さを取り戻してきた。

新人研修中の金沢君は、田邊君のアドバイスを受けて、ヘツリや雪渓の通過もこなしている。まだちょっと、カラビナやシュリングの数が足りなかったけど、ね。

手嶋さんたちは 552mの上の二俣辺りでテン場を求めたが、やはり地形図ほど実際は広げ



いない。栗原さんの計画では、登って風来沢本谷まで下ってから幕というもの。また手嶋さんたちは、右俣を進んで、鍋倉山と国境稜線の 1103mの間のコルを目指したが、こちらは左俣を詰め、川原井戸沢と風来沢本谷の間の 1066mの北のコルから下ろうというもので、急な下降がない。さすが「愛読書は年報」というだけあるワンコ大将である。

左俣に入ると溪はますます狭く、雪溪が不連続に詰まり、くぐれる広さにはない。雪溪の切れた間には滝がある。10mの滝をクリユキが登り、落ち口の水流へ登り込む滝は田邊君が行きと、二人がいれば不安はないし、溪相はナメ状で安定している。

ただチムニー状の滝の通過の際、ザックの引き上げをしたときに、落石があつて、大きいのはヘルメットの後頭部、小さいのは眉間で直接受けた。引き上げるときはザックが周囲を触るし、下では送る作業をしていたりして、注意が散漫になりがちだ。「気をつけよう、上から何か落ちてくる」

そんなこんなで 552mの二俣から 1066mの北のコルまでが 3 時間と、区間としてはいちばんかかった。

稜線部は藪もひどくなく、スラブもなく越しやすい。下り始めると周囲の山肌同様に、老いた毛のない動物の肌のように皺だらけのような山容の一角、灌木地帯でザレている。樹林のある沢筋へとトラバース気味に下り、暗くなる一歩手前で風来沢の本流に出合った。



出合のすぐ上流にテン場を見つけたら、栗原さんから「出合にザックを置いてから偵察に行ってくださいね」と注意されてしまった。「夕日よ急げ」だったのでごめんなさい。

薄暗い中に夕餉の支度をしたのでわからなかったが、周囲はしっとりしたブナ森だった。翌朝はゆっくり出発すると緑灰色の溪底が続き、穏やかな沢にサワアジサイの藍が鮮やか。右岸に踏み跡を見つけ、入溪した川原井戸沢二俣の橋まではほどなくだった。

【グレード】川原井戸沢 3 級

【行程】7/10 風来沢林道車停(9:00)～川原井戸沢二俣入溪(9:40)～はじめの二俣(10:20)～552mの二俣(12:55)～1066 北コルのつこし(16:45)～風来沢本流出合 BP(18:40)

7/11 BP (7:50) ～林道 (9:30) ～川原井戸沢二俣入溪 (9:55) ～車停 (10:25)

【地図】貉が森山・沼沢沼・安座・御神楽岳